

美の創造

Photo / KOS-CREA

美の源泉は「思い」と「世界観」にある

「フラワーアートに見る日本人の美意識」

日本人には、欧米人とは違った独特の美意識があるといわれます。それは絵画や彫刻、音楽などに限らず、料理や家屋、自然の万物にいたるまで、あらゆるところに「作り手と見る者の心」として表現されています。フラワーデザイナーである落合邦子さんは2014年6月、この日本人特有の美意識を発信する個展をパリで開催、多くの現地フランス人を集めました。落合さんの考える日本人の美意識はまさに「心」にあります。

作り手の思いや世界観が「美」を感じさせる

秩序よく整然と配置された、シンメトリな表現に美しさを見出す文化は欧米に根強いようで、無論それは日本の文化の中にもあります。しかしフラワーデザイナーとして多くのフラワーアレンジャーを手掛けてきた落合さんの考えは、それは少し異なるところにあるようです。「いい素材を集め、それをいいねいに配置することは見た目にも美しいものです。しかし、フラワーアレンジャーに限らず、美とは即物的なものではなく、作り手の思いや世界観が表現されているべきです」

そのような、目には見えない部分にも「美」を見出すのが日本人特有の感じ方なのだと言合さんは語ります。

日本人の美意識を象徴する4つのテーマ

2014年、パリで個展を開催するにあたり、落合さんは日本人にとっての「美」とは何かを追究し、4つのキーワードを導き出して、それをテーマに創作に挑みました。

透ける



▲簾や竹林の細い隙間から見える物に、日本人は美しさを感じます。越前和紙の繊維の隙間から、花々が織りなす色のグラデーションを透けるように見せることで、一層の美しさを感じさせます。

垣間見る



▲障子の開口部から庭を見るように、対象が一部隠れていることで、その奥に広がるものへの期待が高まります。流木と苔で作る庭を垣間見るように越前和紙の隙間から対象を眺めることで美しさを感じさせます。

◀しっかりと固定されたものよりも、人の気配やわずかな風に揺れる物に、日本人は「はかなさ」や「美」を感じるもの。漆器に映る花の揺らぎも演出し、天井からは照明を漆器の水面に落とし、揺れる月影を表現。

揺れる



▼大自然を身近なものに見立て、小さな空間で再現した箱庭のような世界に、日本人は自然や神との共生を感じるもの。この個展に際し、ヨーロッパに初めて持ち込まれた「華炭」という、植物を炭にしたものを用いて表現。

見立てる



掲げたテーマは「透ける」「垣間見る」「揺れる」「見立てる」。日本人特有の審美眼は、必ずこの4つに惹かれると確信した落合さんは草花を用いて、独自の世界観とテーマに基づいた空間を創り出しました。

「不明瞭なものへの想像と洞察は、見る者に無限の広がりを与え、世界を増幅させます。同時に控えめな様子に洗練されたものを感じるでしょう。『透ける』『垣間見る』は、日本人特有の「不完全の美」にもつながります。『揺れる』では草花や水面が、見えないものでかすかに動かされる様子に自然の力を感じ、同時に静寂感を一層強めます。『見立てる』は、手に取ることのできない大自然への崇敬と、自分自身を含めた、そこに生きる生命を感じずにはいられないはず」

身近なものに「思い」をこめて

この創作で特徴的なことは、草花以外にさまざまなものを素材として用いていることです。日本古来の越前和紙のほか、流木や漆器、着物裂に加え、箱庭にはワイン木箱を活用しています。

「素材選びにも、作り手の内面が表れます。そこに「思い」がこもっていれば、草花とともに、素晴らしい空間を創り出してくれるでしょう」

これらの創作空間は、パリでは「詩を鑑賞するようにフラワーアートを楽しむ新たなスタイル」として受け入れられたとのこと。同時に日本人の美意識について海外で理解を深めてもらうきっかけにもなったともいえます。

落合邦子

フラワーデザイナー、有限会社アトリエオルタンシア代表取締役。慶應義塾大学文学部仏文学科卒業。2010年、パリ日本文化会館のブティックにて「涼」をテーマに個展を開催。2011年、パリで行われた久石譲氏のチャリティーコンサート会場での「日本再生」をテーマとしたアートフラワーのディスプレイを手掛ける。2014年、パリで「日本人の美意識」をテーマに、花・和紙・炭・流木を使った空間ディスプレイ展を開催。自身が主宰するフラスクールは30年以上続いている。著書に『花でめぐるフランス』(誠文堂新光社)、『ザ・ストーリー・オブ・フラワーカラー』(パッチワーク通信社)などがある。
アトリエ オルタンシア <http://www.hortensia.jp>

